

## Point of note

### ■ 期待されるゲストハウス

一般的にゲストハウスというと、比較的安価な料金で利用できる、主にバックパッカー向けの宿泊施設を指す。サロンなどゲスト同士の交流スペースがあり、ドミトリー（相部屋）ではトイレやバスルーム、シャワールームは共用のものを使う。「ゲストハウスソイ」では、共用の水回り設備の快適性を重視し、バストイレ付きの客室も設けた。現在、首都圏のみならず地方においても蔵や農家を改修したゲストハウスが登場。外国人旅行者の拠点として期待が高まっている。



民家の一部をリノベーションした「ゲストハウスソイ」の和風モダンな外観。



到着したゲストを温かく迎え入れるスタッフ。



和風の庭に開かれた開放的なソファスペース。



快適でナチュラルな水回り。アメニティも充実。



個室の座敷。この下に半地下風のベッドルームが。

## 「バックパッカー経験者として旅行者の役に立ちたい。 それができるゲストハウスは、私の天職です」

「中国で一緒に働いていた人たちが、事業に賛同して引き続き手伝ってくれているんです。言葉だけでなく、中国の習慣や文化も理解していることでコミュニケーションが容易なことも有利に働くのではないかと考えています」

日本政策金融公庫の利用については、「私にとって唯一の、ベストな選択だった」という植田さん。「日本のシステムに疎い私たちの相談役にもなったださり本当に助かりました」

「旅の中で一番印象に残るのが、人のふれあい。宿泊者とスタッフ、そして宿泊者同士の、楽しくて心温まるふれあいが生まれる場としてのゲストハウスをつくりたかったんです」

そう話すのは、2014年7月に京都府東山区でご主人とともに「ゲストハウスソイ」を開業した植田麻紀さん。それまでは、中国の四川省成都市内で7年間、「シムズ・コージー・ゲストハウス」を経営。世界をリードする旅行書・ロンリープラネットにおいて「成都の安宿としては一番のおススメ」と紹介され高い評価を得ていた。そんな植田さんは、旅好きで、20代前半はアジア諸国を中心に世界を旅して回るバックパッカーだった。

「タイ・インド・ネパールを回ったあと、ニュージーランドで1年間ワーキングホリデーを経験し、その後またアジアに戻り、陸路を転々としてチベットのラサという町に着いたとき、シンガポール出身で漢方薬関係の仕事をしていた今の主人と出会いました。勤務地は中国。そこで私の旅行計画は、中国への語学留学に変わってしまった。でも、旅好きはやめられない。それからはふたりでベトナム、カンボ

のスタイルをとった。

プランニングにあたっては、京都は観光客が多い分、宿泊施設も多い激戦区のため、どのように特徴づけるかを常に考えてきたと植田さんは話す。

「私のゲストハウスの特徴は、ゲストハウスなのにグレードの高い設備が備わっていることです。京都における多くのゲストハウスは古民家や町屋を改造して経営しているので、趣がある反面、どうしても遮音が悪いか、水回りの使い勝手が不便、という問題があります。そこで、シャワールームやバストイレ付きの客室を増築し、ホテル並みの設備を整え、ほかの宿との差別化を図ることにしたのです。ホテルライクな快適性とアットホームさを兼ね備えたゲストハウスですね」

さらに、スタッフ全員が中国語を話せるという強みもある。

「中国で一緒に働いていた人たちが、事業に賛同して引き続き手伝ってくれているんです。言葉だけでなく、中国の習慣や文化も理解していることでコミュニケーションが容易なことも有利に働くのではないかと考えています」

日本政策金融公庫の利用については、「私にとって唯一の、ベストな選択だった」という植田さん。「日本のシステムに疎い私たちの相談役にもなったださり本当に助かりました」

「中国で一緒に働いていた人たちが、事業に賛同して引き続き手伝ってくれているんです。言葉だけでなく、中国の習慣や文化も理解していることでコミュニケーションが容易なことも有利に働くのではないかと考えています」

日本政策金融公庫の利用については、「私にとって唯一の、ベストな選択だった」という植田さん。「日本のシステムに疎い私たちの相談役にもなったださり本当に助かりました」

「中国で一緒に働いていた人たちが、事業に賛同して引き続き手伝ってくれているんです。言葉だけでなく、中国の習慣や文化も理解していることでコミュニケーションが容易なことも有利に働くのではないかと考えています」

日本政策金融公庫の利用については、「私にとって唯一の、ベストな選択だった」という植田さん。「日本のシステムに疎い私たちの相談役にもなったださり本当に助かりました」

### Profile

ゲストハウスソイ 代表 植田麻紀さん

高知県出身。旅館のフロント業を経て世界を旅するバックパッカーに。旅先で出会ったご主人と中国でゲストハウスを経営後、2014年7月、京都東山区で「ゲストハウスソイ」を開業。

「これからも、お客さまに関心を持って話し掛け、ふれあいのときを充実させていきたいですね。また、遮音性を高めるために一部建て替えを検討しています」

そして、瞳を輝かせよう付け加えた。「コールセンターのような、旅行者がいつでも相談できるシステムがあればすぐにでもお手伝いしたいですね」

すべては「旅行者の役に立ちたい」という想いから始まっているようだ。

**STEP 3 今後の展望**  
お客さまに関心を持ち  
ふれあいのときを充実させる

オープンから約1年。訪日外国人旅行者急増の波に乗り、「ゲストハウスソイ」は予想以上に高い稼働率をキープしている。また、世界最大級の宿泊予約サイト「ブッキングドットコム」のゲストハウス部門において常時トップテン入りを果たす安定ぶりだ。

「これからも、お客さまに関心を持って話し掛け、ふれあいのときを充実させていきたいですね。また、遮音性を高めるために一部建て替えを検討しています」

そして、瞳を輝かせよう付け加えた。「コールセンターのような、旅行者がいつでも相談できるシステムがあればすぐにでもお手伝いしたいですね」

すべては「旅行者の役に立ちたい」という想いから始まっているようだ。

# ゲストハウスソイ

<http://guesthousesoi.com>

海外から日本へ続々と  
観光客が訪れる昨今、旅の拠点となる  
宿泊施設のあり方が注目されている。  
京都に誕生した、一軒のゲストハウス。  
豊かな旅の経験を活かした  
独自のスタイルが評判を呼んでいる。

## STEP 1 創業のきっかけ 世界中を旅した経験を糧に 自らゲストハウスを開く

「旅の中で一番印象に残るのが、人のふれあい。宿泊者とスタッフ、そして宿泊者同士の、楽しくて心温まるふれあいが生まれる場としてのゲストハウスをつくりたかったんです」

そう話すのは、2014年7月に京都府東山区でご主人とともに「ゲストハウスソイ」を開業した植田麻紀さん。それまでは、中国の四川省成都市内で7年間、「シムズ・コージー・ゲストハウス」を経営。世界をリードする旅行書・ロンリープラネットにおいて「成都の安宿としては一番のおススメ」と紹介され高い評価を得ていた。そんな植田さんは、旅好きで、20代前半はアジア諸国を中心に世界を旅して回るバックパッカーだった。

「タイ・インド・ネパールを回ったあと、ニュージーランドで1年間ワーキングホリデーを経験し、その後またアジアに戻り、陸路を転々としてチベットのラサという町に着いたとき、シンガポール出身で漢方薬関係の仕事をしていた今の主人と出会いました。勤務地は中国。そこで私の旅行計画は、中国への語学留学に変わってしまった。でも、旅好きはやめられない。それからはふたりでベトナム、カンボ

シア、タイなどを旅して、いつしか「一緒に宿ができるといいね」と話をするようになったんです。結婚後しばらくして彼が仕事を辞めるタイミングで、まずはコスト面で負担の少ない中国を舞台に始めることにしたのです」

ゲストハウスの経営だけでなく、植田さんは外国人のバックパッカー経験者という立場で誠心誠意お客さんの世話を当てる。また、アットホームな宿を基本に安全性、衛生面などにも心を砕く。その結果、10年には、世界180カ国・2万7000軒もの宿が登録するブッキングサイト「ホステルワールド・コム」でアジア第3位を獲得した。

こうして一定の高評価を得られるようになった頃から、植田さんのなかで日本での開業という新たな夢が膨らんでいく。「娘ふたりも大きくなり、マイホームを持つって落ち着く場所として日本を選びました。私の出身地が高知県。関西圏の文化的で落ち着く町は、京都以外にはありませんでした」

**STEP 2 事業スタート**  
ホテルライクな快適性と  
アットホームさを両立させた宿

中国での豊富な経験を礎に、新境地での事業計画がスタート。中古戸建を購入後、建物は一部改修、一部増築